

## 私のおすすめ本

小田 圭一郎 教授

(金融論)

若い時分に読んで、経済学の勉強には全く役立たなかったが、今から振り返ってみると読んで良かったと思われる本を3冊ばかり紹介する。

### (1) 貨幣論 岩井克人

筑摩書房 1993年

本書は、当時の学部学生にとってスター経済学者であった岩井先生によって書かれた「貨幣とは何か？」という抽象的な問いをめぐる抽象的な考察であり、マルクスを「その可能性の中心」において読み直す試みでもある。本書は大きく以下の二つの論考に分けられる：(1)貨幣の存立構造についての考察(1-3章)；(2)貨幣の本質が恐慌を経て危機（ハイパーインフレーション）をもたらす可能性についての考察(4-5章）。経済学的には、前者はサーチ理論、後者は岩井先生独自の不均衡動学理論を背景としている。

今回、殆ど20年ぶりに再読し、幾つかの斬新な着想に改めて感銘を受けた。第一に、貨幣の存立構造を考えるにあたり、「労働価値論」を採用しないにもかかわらず、あえてマルクスの価値形態論を援用している意義である。経済学的にはサーチ理論で示せる主張を、「全体的な価値形態」と「一般的な価値形態」との無限の「循環論法」として説明することにより、「売り」と「買い」という二つの行為の分離を導き、経済不均衡へと議論を進めている。第二に、貨幣は商品として他の財と交換されるにもかかわらず、貨幣自体には市場が存在せず、従って、価格を通じた需給変化への対応ができない点である。この事実が、恐慌や危機につながっている。最後に、貨幣を通じて「買う」ことの本質的な困難がハイパーインフレーションを引き起こすという指摘である。これは銀行理論における銀行取付モデルと理論的類似性があり、この観点からは、「信用」ないし「信認」という概念を通じて本書の議論に拡張の余地があり得ることを感じた。

本書出版以来、二度の金融危機や電子マネーや暗号通貨の発展という、従来の金融観を揺るがしかねない大きなイベントを経て、本書で論じられた貨幣に係る抽象的論考は、現前する具体的な課題として、その重要性を一層増している。

(2) 集合とはなにか -はじめて学ぶひとのために- 竹内外史

講談社ブルーバックス 1976年

本書は、数学基礎論の世界的権威であった竹内先生により、「数学的訓練がなくても物を読んで考えることのできる大人」を念頭に書かれた啓蒙書である。しかし、それは本書が易しく読めることを全く意味しない；むしろ、読者に対して、前提知識は必要としないが、多大な知的努力を要求する本である。

最初の2章で、論理学とカントール流の「素朴集合論」が簡潔に記述された後、以降の章で、「公理的集合論」(ZF 公理系)とそれ後の集合論の展開について、著者独自の直観に基づく説明が、時に大胆な形で与えられる。本書を読むことにより、我々は、必ずしも数学的に厳密ではないが、信頼できる数学的直観を通じて、(1970年代までの)先端の数学基礎論にアクセスすることが可能になる。

我々にとって、数学基礎論それ自体はおそらく趣味の領域に属する。しかし、そこで用いられる論理性や概念化のための徹底した抽象性に触れることは、いかなる職業人生においても、決して無駄にはならないことを確信する。

(3) 地獄の季節 ランボオ (小林秀雄訳)

岩波文庫 1970年

Arthur Rimbaud の詩を小林秀雄の見事な誤訳！で読める至福。